



近森会グループ

びろっば

7

Vol.264

発行 ● 2008年6月25日

www.chikamori.com 高知市大川筋一丁目 1-16 〒780-8522 tel.088-822-5231 fax.088-872-3059 発行者 ● 近森正幸 / 事務局 ● 川添昇

AO Fellowship trauma center in Japan 日本初の AO fellowship trauma center 登録

整形外科をグローバルに 発展させます!

前列左より、上田 英輝科長、西田 一也部長、衣笠 清人統括部長、道中 泰典部長 ▶

AO 財団 (本部はスイスです) は、現在は AO international, AO spine international, AO CMF から構成される四肢外傷・顔面外傷学および脊椎外科の世界的研究・教育機関ですが、もともとは 1958 (昭和 33) 年に Swiss AO (Arbeitsgemeinschaft für Osteosynthesefragen) を M.E.Müller らが骨折治療の研究・教育機関として設立したのが、そもそもの始まりです。

以来発展を続け、ちょうど今年が 50 周年の記念の年でもあります。この歴史的名称から、この組織の提唱する骨折手術法は AO 法と呼ばれています。

私の師匠である長野健治先生が若かり

し頃、ベルン大学の教授であった Dr.Müller のもとで勉強された関係で、私も研修医時代から AO 法に親しんでまいりました。

毎年スイスのダヴォスで AO コースという研修会が催されていますが、当院からは若手ドクターが必ず参加しています。したがって当科の骨折治療法の基本は AO 法であり、若手ドクターたちはこれを研修するために近森病院を希望してやって来ていると言っても過言ではないでしょう。

AO fellowship 制度は AO 財団の教育部門が行う 1-2 カ月の短期留学支援制度

整形外科 統括部長 衣笠 清人

後列左より、大野 尚徳、西井 幸信科長、井上 智雄、宮澤 慎一、高矢 憲一、田中 孝明。中列、研修に来られていた高知大学学生の鈴木美香さん、片山 直志の各医師 ▼



▼スイスにある AO センター



ですが、ヨーロッパを中心に世界に 120 施設程度の host-hospital (fellowship center) があり、毎年日本からも何人かのドクターが留学しています。

日本の骨折治療レベルは諸外国に比べて決して劣るわけではありませんが、残念なことに今までわが国には host-hospital は一施設もありませんでした。

ところが幸運なことに、またたいへん名誉なことに今年 4 月 22 日付で当院が日本初の AO fellowship trauma center として登録されました。アジア・オセアニアで 10 番目であります。

これにより今後は国内だけでなく国外からも研修希望のドクターが当院に来る可能性が出てまいりました。当科をグローバルに発展させるという今年からの新たな目標が現実味を帯びてきていることを感じております。

今回のことを励みに整形外科医師全員がますます勉強し、しっかりとした診療体制のもとに、ハイレベルの診療内容を提供できるよう努力していく所存ですので、皆さまどうかご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

人間本来の生き方



近森 正幸

最近秋葉原通り魔事件や東京江東マンション女性行方不明事件など、常軌を逸した事件が多発している。そうした犯罪を引き起こす原因について家族や人間関係の破綻があるのでは、と指摘されている。

マンション女性行方不明事件の犯人の行動は、数多くの人の死に立ち会ったり、身体にメスを入れることに慣れている外科医だった自分から見ても、尋常な神経では出来ない異常性を感じさせる。

カラーテレビ放送が本格化した昭和 50 年前後からおよそ 30 年、そし

てゲームソフトのドラゴンクエストが発売されてすでに 20 年余りになる。こうしたことに夢中になった世代の最初は、すでに中年にさしかかっている。

テレビやゲームの時代以前の世代が持っていた深い洞察力や人間や社会との関わり方、当時の人の堅実な生き方が、いまはすっかり廃れてしまったように思える。

テレビ世代の、受動的で自らの判断で考え行動することに慣れていない人たちが多くなり、ゲームの中の仮想世界に入り込んで、生の人間との関わりがきわめて希薄になっているのではないか。日本の社会のいびつさがこうした犯罪を生み出す源になっているように思う。

人間の生きる目的は「魂を磨くことだ」と、京セラ創業者の稲盛和夫は言っているが、こんな日本の今だからこそ人間本来の生き方を考えるべきではないだろうか。

理事長・ちかもり まさゆき

近森会グループ

輸血療法委員会と高知県の取り組み

輸血療法委員会 委員長
麻酔科部長 畠中 豊人

ここ数年の高知県の輸血の現状

ここ数年の高知県における輸血の現状を振り返ってみると、血液使用量は増加の一途をたどり、慢性不足の状態となっている。赤血球製剤の単位人口あたりの使用量は2006年には、四国四県や全国平均と比較して20%以上も突出した数値となり、献血量不足ともあいまって、県外依存率は17.5%にも達した。県内での血液自給は壊滅状態とも言える現状であった。この事態を憂慮した高知県は、2007年1月に、近森病院を含めた県下の主要病院の責任者を集め、輸血の適正化を求めた異例の要請を行った。

輸血療法委員会の新たな対策

一方、近森病院においては2000年5月より既に輸血療法委員会を立ち上げ、血液使用量の削減に取り組んでおり、2006年末の時点で血液廃棄率は約13%から6.9%へと半減されていた。血液使用量そのものをさらに削減することは、既に少なからず困難な状況となっていたため、輸血療法委員会では新たな対策として、**タイプアンドスクリーン (T&S) による血液オーダーシステム**を、2006年12月に立ち上げたところであった。

▶血液保冷庫の前で畠中委員長の「記念撮影！」の掛け声にバタバタ応じてくれた委員



後列左から工藤師長、佐野師長、米澤技師、小川薬剤師

前列左に畠中部長、右に沖師長

血液製剤使用量の削減

県の要請と奇しくも時期が一致したこのT&Sシステムの導入により、近森病院における2007年の血液製剤の使用量は、2004-5年のピーク時

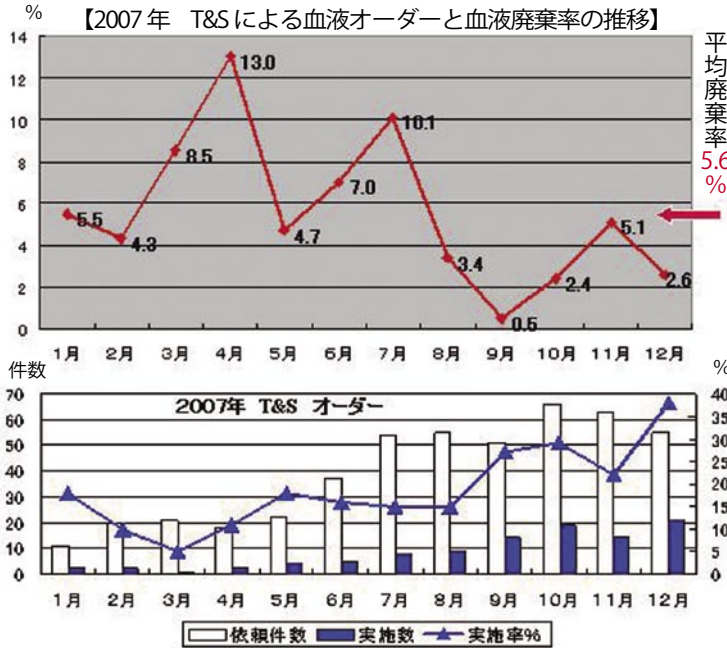
血液センターと輸血・細胞治療研究会

さらに、県による輸血の適正化要請

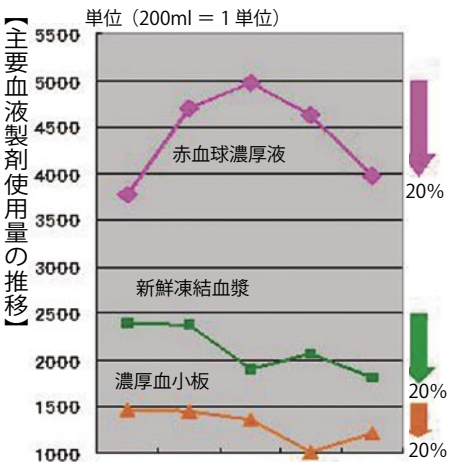
と呼応する形で、高知県赤十字血液センターは「輸血・細胞治療研究会」の開催を呼びかけており、2007、2008年と、既に2回の開催がなされている。

この会合では、高知県内の主たる病院の輸血責任者が集合し、実務者レベルで様々な情報交換を行っている。前述の内容もこ

の会合で話し合われ、またご報告をさせていただいたことの一部である。



と比較して20%の削減を達成し、廃棄率も5.6%まで減少させることができた。しかも、輸血を伴う主たる手術・処置件数が7.3%もの上昇をする中での20%削減であることは特筆に値すると言える。



近森病院の果たすべき役割

近森病院の血液使用量は医療センター、大学病院、日赤と並び、高知県内では大きなシェアを占めており、それはそのまま高知県全体に大きな影響を与えるものである。私たち輸血療法委員会は、そのことを十分に自覚した上で、今後とも高知県全体の血液行政との係わり合いをしっかりと保ち、各病院間の連携を深めて、近森病院がその責任を果たしていくための努力を続けていきたいと考えている。



外来担当看護師長 西本 清香
My 聴診器で初心に...

今年も、新人さんが入職して、はや3カ月が過ぎようとしている。思い出すのは、3年前、看護学校で仕事をしてたときのことだ。実習や授業で必要になるため学生のMy聴診器を注文する手伝いをしていた。

自分で選んだ聴診器が届くと、きらきらと瞳を輝かせてうれしそうに受け取った学生の笑顔を今でも忘れることができない。その学生の瞳をみたとき、自分がMy聴診器を初めて手にした時の感動を思い出すことができた。聴診



器を首にかけ、看護師になったようなくすぐったい気分と同時に、責任の重さを再認識したものだ。

その学生たちも、今年、卒業し病院という新たな環境で頑張っている。3カ月がたち、聴診器を手にする姿も板についてきた。現場の少しだけ先輩として「負けるな!頑張れ!」とエールを送りたい。

そして、自分も、My聴診器を手にした時の初心に戻り頑張らねば……。

医療安全セミナー

第51回 地域医療講演会

あなたはインスリンのこと 本当に知っていますか？

明日からあなたがアドバイザー

展示コーナーもけっこう充実していました！

近森会グループ 医療安全委員会 委員長 山崎 正博



①ヒヤリハット報告の分析からインスリン関連事例の報告が多いこと、②インスリン製剤は種類が多く間違いのもとになりやすいこと、③単位量の間違いで低血糖や高血糖を来し重篤な意識障害を引き起こすこと、④今後糖尿病患者が増えインスリン製剤を使う機会が増えること、などの理由から今回のテーマを選択した。

多種類のインスリン製剤の使いわけを間違いなく行うためには糖代謝異常をきたす糖尿病を理解する必要があり、糖尿病全般について内分泌代謝科科長の葛籠医師に講演していただいた。

また多種類のインスリン製剤については製品説明、使用上の注意点などについて嶋崎薬剤師に解説してもらった。最後に当院でのインスリン関連ヒヤリハット報告について、山脇看護師より事例を紹介して、原因と対策を具体的に説明していただいた。

インスリンは身近な劇薬であるという認識があり、院内院外あわせて237名の参加をいただいた(35病院)。

そのほか当院の医療安全委員会の活動を見ていただくために週間医療安全通信、医師医療安全通信、医療安全カンファレンス集、指差し呼称項目カード、安全標語などを展示・掲示した。



後列左から西村師長、増井看護師(セーフティNs)、片岡看護師(セーフティNs)、田村主任(セーフティNs)、永野主任(セーフティNs)、高橋主任(セーフティNs)、斉藤師長、遠藤主任、武内事務担当、小谷主任、川村教育・業務担当師長。前列左から筒井薬剤部長、田代管理栄養士、田村放射線技師、嶋崎主任★、葛籠科長★、山脇主任(セーフティNs)★、青木医療安全担当師長、近森院長、山崎委員長(司会)、竹崎主任(セーフティNs)、和田秘書。但し★は演者

私たちが会を盛り上げました

院外エッセイ

「えい夢やったねえ」と 言わんといかん

『戦地からの手紙』を編集する会 代表

松本 瑛子



まつもと てるこ 昭和16年6月春野町生まれ。高知大学、鳴門教育大学大学院(修士課程)卒業。昭和39年から県立学校教員を務め、退職後は高知県文化財保護審議会委員、土佐史談会理事など、「ほそぼそとやっています」。

私は孫の保育園の送迎をしているが、朝の大変なこと。なかなかご飯を食べない、こぼす、喋る、動く。わたしは「はよう、はよう!!」と繰り返すばかりだ。

ふっと、60年前の朝食の風景が蘇ってきた。祖母を相手に時間のかかる子だった。タベ見た夢を長々と喋り続けた。祖母はよく聞いてくれたし、話し終わると、必ず「えい夢を見たねえ」と言ってくれた。どれだけそんな時間を繰り返したことだろう。

少し、大きくなったある日、おかしなあとと思って「お祖母さんは必ず、いい夢やったねえ、と言うけど、今日の夢は怖くてちっともいい夢と思わん」と言ってやった。

すると、祖母は「わたしはお祖母さんに、夢を見たときは、他人に話さないかん。また、他人が夢の話をするときは、一生懸命聞いて、終わったら、えい夢やったねえ、と言わんといかん」と教えられた」と応えたのだった。

50年違いの祖母、また50年違いの高祖母(祖母の祖母)との100年の物語だ。因習をひこずった日本は、科学の国に戦争で敗れたのだと気負っていたわたしは、「あ〜あ、また、お祖母さんの迷信」と切り捨て、それから夢を見ても人に話すこともなく、祖母とも次第に離れていった。

スイスの心理学者ユングの研究のなかに「夢の話」がある。夢には、自分では意識していないけれど心の底に残っている(おぼろ)みたいなものがいろいろの形で出てくるそうで、それを語ることで心が癒され、安定した状態が取り戻せるという。今でも南方には夢を語り、家族がじっくり聞く習慣を残した地域もあるそうだ。

ちゃぶ台が消えてから家族がおかしくなったという人もいるが、代々伝えてきた家の文化も消えたのだろう。わたしも、朝から「はよう、はよう」では、孫の心も安定しないし、祖母の伝える文化も伝わらないと、わかっているのになあ…。

2008年5月の診療数

近森会グループ

外来患者数	17,755人
新入院患者数	835人
退院患者数	809人

近森病院

平均在院日数	13.87日
地域医療支援病院紹介率	81.76%
救急車搬入件数	442件
うち入院件数	215件
手術件数	407件
うち手術室実施	248件
うち全身麻酔件数	154件

企画情報室

6月4日はむし歯予防デー

近森病院 歯科衛生士 北川 弥生・影山 香
近森リハビリテーション病院 歯科衛生士 楠瀬 美佐・植田 彩子



左から、植田彩子、影山香、北川弥生、楠瀬美佐

6月4日に近森病院1階において、歯・口腔ケア相談コーナーを設置し、12:30からの1時間一般の方や職員を対象に歯科衛生士4人が相談を受けました。

13名の方が相談にみえ、内容としては、一般の方は、口臭や、歯並び、義歯のことなど、職員は、むし歯や患者さまのケア方法などでした。むし歯の原因、予防、歯周病についてのパネルを展示し、口腔清掃についてのパンフレット、キシリトール入りガムをプレゼントし、皆さんに好評でした。

1時間という短い時間でしたが、皆さん熱心に相談され、日頃気になることをお話しくださいました。これから、歯科衛生士がお口の健康づくりのお手伝いが出来ればと考えています。



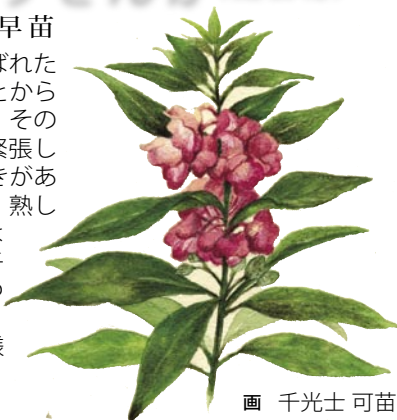
7月の歳時記・ほうせんか(鳳仙花)



文 経理課 服部 早苗

花の形が鳳凰(中国で尊ばれた想像上の鳥)に似ていることから名がつけられたほうせんか。その花には疲れた身体を癒し、緊張した筋肉をリラックスさせる働きがあります。花が終わると紡錘形の実がなり、熟したものにちょっとでも触れると、一瞬にはじけて種子が四方八方に飛び散ります。子どもの頃、これがおもしろくてよくつっついて遊びました。

花言葉の「私にふれないで」は、その様子から生まれたものです。



画 千光士 可苗



うちのアイドル 近森病院 6東病棟 溝渕 次恵

長女を出産し、早1年6ヵ月が過ぎました。今では家中を走り回ったり、いたずらをしたりとやんちゃな女の子に成長しました。最近のお気に入りにはアンパンマン。電車で見かけると大はしゃぎ。また、いろいろな言葉を覚え、表情をコロコロ変えながら一所懸命にお話してくれる姿は可愛くてたまりません。託児所での様子を書いた連絡帳は、家族みんなの愛読本となり、日々成長する姿を喜んでいきます。



ち心深(こころみ)ちゃん

管理部長のカンタンこだわり料理 26

茗荷ちまうがはそれ自体味は余りないが、しゃきしゃきした歯応えとさわやかな香りが持味である。刺身のつまや汁物の具、酢の物など主に脇役として使われることが多い。そんな茗荷を今回は白身魚とガブリ四つに組ませた。



川添 昇

茗荷と鯛のあえもの



画 臨床栄養部長 吉田 妃佐

〈作り方〉①鯛(白身魚なら何でも可)の昆布締めを作る。鯛をサクで買ってきて5ミリぐらいの削ぎ切りにし、2枚の昆布を水に30秒~1分位つけて少し柔らかくしてはさみ込み、ラップをして皿などで重しをし3時間位冷蔵庫に入れておく。②茗荷をタテ半分に切り、横にして薄切りにしてさっとゆがいて(5秒以内!)ザルに上げ、酢大さじ1(酸っぱさは好みで)、だし1/2カップで5分ぐらい浸す。③①を取り出し、うす口醤油少々とだしに浸す。④それぞれを取り出して器に盛り付ける。そして冷蔵庫で少し冷やす。好みでレモンやスダチを絞ってもよい。

〈食べ方〉本シリーズは結局酒の肴シリーズということになっているので、まず酒を選ばなければならないが、結論を言うと赤ワイン以外は何でも合うのではないと思う。最近は千円台のスパークリングワインにはまっているが、たまには日本酒、司牡丹の純米大吟醸あたりをキンキンに冷やして飲ってみる。

クラッシュアイスを入れたガラスの器に錫のとっくりを入れ、錫の杯だともことに具合がいい。たっぷりダシのしみたシャキシャキ感の残った茗荷と、昆布の香りの鯛の上品さ。それにさわやかな冷酒が加わることとなるので口の中は幸福でいっぱい。横文字で思わず「コラボなマリアージュ」と訳の解らないことを口走ってしまいそうである。

講演会

日時	講演名	演題	講師	会場
7月18日(金) 18時30分~	第53回 地域医療講演会	地域医療における病診病連携 ——市立静岡病院心臓血管外科の経験	静岡市立静岡病院 院長 島本光臣先生	近森病院管理棟 5階会議室
7月31日(木) 18時30分~	第54回 地域医療講演会	感染症診療の原則	感染症コンサルタント 青木真先生	ホテル サンルート高知

平成 20 年度高知市総合防災訓練での近森病院の活躍報告

平成 20 年 6 月 8 日 (日)

高須浄化センターで

一日頃の訓練や体制整備・連携の 必要性を痛感



1) 多重事故救出訓練の近森 DMAT



2)

根岸正敏部長→



3) ←山崎明美主任

1) 多重事故救出訓練の近森 DMAT
2) 災害医療救護訓練中、神の声役の根岸正敏部長（右端）と、同じく神の声役の山崎明美主任（写真3の左手前）

新シリーズ★近森会交友録エッセイ

熊本城の歴史に 触れてみませんか？

医療法人 青磁野リハビリテーション病院
金澤会
事務部長 島森 万二

しまもり まんじ 昭和 25 年 10 月 14 日、熊本市生まれ。家族は妻と一男二女。大学卒業後、住宅会社などを経て、昭和 62 年に金澤会に就職。平成 2 年より現職。以来、川添昇管理部長とは「自分は九州の盟友、別名舎弟(笑)」と称する間柄！



年度始めに某管理部長から「うちの広報誌『ひろっば』に何か文章を書いてくれ」との突然の依頼。

断るほどの勇気も持ち合わせず、「それじゃ、いつも送っていただける広報誌担当の方にもお礼という意味で書いてみましょう」と、熊本のことについて書いてみることにしました。

熊本といえば有名なのが、「阿蘇山」に「熊本城」。皆さんも熊本にいらしゃったら大半の人が行かれると思いますが、とくに昨年から今年にかけては「熊本城築城 400 年」に当たり、様々なイベントが企画されました。

5 月のゴールデンウィークでは見物する観光客は大変な数になったそうです。歴史的には熊本城は加藤清正が 1588 年(天正 16 年)に隈本城(当時は熊本城ではなかった)に入城し、1601 年(慶長 6 年)に築城着手し、6 年の歳月をかけ 1607 年(慶長 12 年)に完成、隈本城を熊本城に改称したものです。

それで築城 400 年を記念して数々の櫓や塀などの復元工事が昨年からは始まり、今年の 4 月に最後である本丸御殿が完成したものです。熊本城の魅力は色々ありますが、私は戦国時代を彷彿させる男性的なフォルム。「武者返し」と呼ばれる美しい曲線を描く石垣。とくに石垣は戦略的な意味でも美しさにおいても他の城の追従は許さないとします。

他にも「馬刺し」など色々と熊本のグルメなどもあり、ぜひ熊本においてになり、加藤清正が築城し日本三大名城に挙げられる男性的な熊本城の歴史に触れてみませんか？ お待ちしていますよ。

新シリーズ●近森会グループが日頃お世話になっている県内外の方々から、エッセイを寄せていただく「コーナー」が始まりました。どんな話題が展開されますやら。読者の皆さまもぜひお楽しみください！(ひろっば編集室)

近森会グループ
災害対策委員会 委員長
北村 龍彦



平成 20 年度高知市総合防災訓練が 6 月 8 日(日)に高須浄化センターのグラウンドで開催された。訓練想定は M8.4 の地震発生であり、この中で高知県災害医療対策高知市支部による災害医療救護訓練と多重事故救出訓練が行われた。

救護病院である高知高須病院が担当した災害医療救護訓練には、山本彰部長を中心に、近森病院災害対策委員会のメンバーが計画の段階から指導に加わり、当日も救護病院 12 施設 45 名、看護学生 55 名の模擬患者らの訓練に「神の声」のゼッケンをつけアドバイスしていた。

一方、多重事故訓練では、井原則之科長がレスキュー部隊・救急隊と連携を取りながらシナリオ作成から実践指導のコーディネーターを務め、竹内敦子医師率いる「近森 DMAT」が高知日赤チームと協力して、事故現場に出勤し、医療救護を担当した。

最近、中国や岩手・宮城内陸での地震も発生しており、何時どこで地震や災害が発生するかもしれない、近森病院をはじめ、関係機関で日頃の訓練や体制整備・連携が必要と痛感させられる。

日米それぞれの仕事の流儀

第7回の今回のメンバーは、まさに当院のチーム医療を実証する人選となった。現地の日本人の先生お二人のおかげで、心臓外科に限定しない極めてバラエティに富んだ幅広く密度の濃い研修ができた。病院の集中治療室、HCU、一般病床の一日の入院費はそれぞれ40万、20万、10万円だそうで、高度なサービスを支えるにはそれなりのお金がかかる！と痛感。医療従事者の少ない国民皆保険の国と、医療従事者数が多いが5000万人が無保険の国、どちらが良いか、難しいところですね。

(米国医療研修チームの入江博之団長：ハートセンター／心臓血管外科部長 談)

管理部 総務部長補佐

宗石 勘九郎

日米に共通した仕事の基本

今回の一番の収穫は、ウィスコンシン大学心臓血管外科の事務担当 Joe との出会いでした。彼の仕事は私の業務と重なる部分が多かったし、最も重要な2点は、①我々の仕事の顧客は患者だけではなく職員全てだと常に意識していること。②多くの顧客からの要求に対して、特定の人だけに偏ることなくバランス感覚を持つこと。私も、「全てが顧客」という考え方は、社会人になった最初に当時の先輩から教わったことであり、基本的な考えとして常に意識していますが、バランス感覚に関してはまだまだ未熟な点があります。

ただ、この考え方が文化や習慣の違う別の国でも同じように仕事の基本とされていることがわかっただけでも、とても大きな収穫でした。

顧客満足の意味するもの

もう一つ、顧客満足は仕事を進める上で最も注意すべき点だと Joe は言っていました。彼は、顧客満足を高めていくということは、顧客とその関係者(患者とその家族)に対する細々とした気遣いやサービスの積み重ねを継続して行うことだと言っていました。そして顧客満足を高めていくことが最終的には患者数の増加や学生数の増加、職員の増加につながっていくとも言っていました。

私は、日本の医療界はまだまだ顧客満足がないがしろにされていると常々感じています。細かな気遣いができるということは、先ほどのバランス感覚と同じように経験が必要なこととは思いますが、これから少しずつでも勉強してできるだけ早くこういった感覚を身に着けて、業務に生かさなければならぬと認識することができました。

努力に見合う成果

米国胸部外科学会では、大学の見学以上に語学力の無さを痛感しました。

▶研修最初に入江部長の英語での講演から



◀前列中央のウィスコンシン大学心臓血管外科エドワードズ教授を囲み、現地でお世話になった前列左が甲元先生、後列左端が大崎先生。他、チーム医療実証のご一行は、前列右端が入江部長。後列右から久保田総師長、宗石補佐、和田英大技士(A.C.E)、田井遥看護師(4東)、内山里美臨床栄養部主任、野本真紀薬剤師

専門的な知識や自分の業務に関連すること以外にも勉強しなければならないことは多く、また、多くの努力をすればそれだけ得られるものが増えていくということを実感するきっかけともなった研修だったと思っています。

近森病院 総看護師長

久保田 聡美

意欲溢れるナースへの支援環境

薬剤師、栄養士、管理部門のマネージャーそして様々な資格と職位にあるナースから多くの示唆を戴きました。とくに印象的だったのが、ICUで患者指導にあたる専門看護師、循環器関連のサービスライン全体を統括する管理者、看護学校の教授及び学部長、ナースプラクティショナー、ICU及び循環器病棟の管理者等々。看護師不足は世界的な問題であること。病棟ナースが自分自身のキャリアを振り返り、上級看護師を目指し、パートナーをしながら勉強していく流れがあること。が、急性期病棟の管理者にとっては、新人ナースを現場で必死に育てても離職する一因であり(キャリアアップは喜ばしい反面)大きな問題となっており、どこの国でも共通だと感じました。

ただ、そうした意欲的なナースの絶対数も多く、支援する労働環境や教育環境が整っているところはさすが米国

だと羨ましく感じました(当院でも徐々に増えてはいますが、まだまだ少数派)。

知識が変換される手ごたえ

また、上級看護師の中のCNS(clinical nurse specialist)やNP(nurse practitioner)の方々の生の声を聞くことができ、これまでの知識や情報が生きた情報として変換される手ごたえを感じました。日本の医療崩壊が危機的に報道される中、CNSの処方権や臨床場面での権限委譲が議論されていますが、患者にとってどんなシステムが一番よいのか、保険者(一人ひとりの国民)にも説明責任が果たせるシステムとは、という視点が大切だと痛感しました。

学会プログラムのシンプルさと学会評価の基準

学会参加で痛感したことは、参加者の規模に比してプログラムがシンプルであること。日本の同規模の学会では同時進行のプログラムが多すぎて、聞きたい演題を充分きけない不全感を持つことが多いのですが、それとは対照的でした。

学術集会の質を保つためにも、演題数で学会を評価するのではなく、その領域にとって有用な論文や研究を評価していくシステム創りが重要だと感じました。

※次ページへ続きます。

近森病院 薬剤部 薬剤師

野本 真紀

医師にとっての補助的な権限を持つ職種の存在に驚き

大学病院の見学は朝7時からの入江部長によるモーニングカンファレンスから始まりました。多数の病院スタッフの参加による、熱気ある議論といきなりの英語の応酬に、最初から思わず圧倒されてしまいました。

その後、さまざまな職種のスタッフとお会いしてそれぞれの立場からのお話を伺うことができ、日米では医療制度が異なっているのはもちろん、考え方や方針についても大きな違いがあり、それぞれに利点や欠点が存在するというのを感じさせられました。

米国では医療費が高額である分、設備やスタッフには余裕が感じられ、日本にはない専門職も存在し、幅広く業務を分担して医療に取り組んでいました。例えば、ナースプラクティショナー(NP)というスペシャリストが存在し、医師の補助的な権限を与えられています。もちろん医師にしか決定権のない部分も存在し、彼らの行える医療行為は限られており、外科手術などは行えません。しかし例えば単純な風邪で外来にかかった場合、診察してくれるのは医師ではなく彼らであり、処方や検査オーダーも出すことができるのには非常に驚かされました。なによりも、一般のナースから認定資格を取りNPとなったことで、自分に対する周りの信頼度が変わったのだと話すNP達の非常に誇らしげな表情がとても印象的でした。

一錠まで徹底したバーコード管理

私と同じ薬剤師の方々にもお会いしました。調剤自体は少数の薬剤師の監督下にテクニシャン達が行い、薬剤師は主に各病棟に常駐し、処方チェックや服薬指導といった病棟業務を行っているとのことでした。薬は錠剤1錠まで徹底してバーコード管理されており、いつ、誰が、何を、誰に使用したのか全てデータとして残るシステムとなっていました。見学したICU病棟にまで薬剤師とテクニシャン各一名が常駐しており、薬剤師がこの病棟の中で最も忙しいスタッフなのだ、との話には日本の薬剤師との違いを思わず考えさせられずにはいられませんでした。

サンディエゴでの学会参加を含め、新しい知識を得ることができたと共に、新しい視点、広い視野を持って今後医療に取り組む必要性を感じさせられる大きな経験となりました。



看護部 キラリと光る看護 その38

“聴いてなんぼ”

看護部長

“ケアしてなんぼ” 梶原和歌

先日、「高知心理療法研究所」主催の第17回カウンセリン講座(年間6講座)が開催され、東大大学院教育学研究科教授の倉光修先生の「内なる対話から示唆される道・心理療法の個人的統合の一例」という演題での講義がありました。

今回の「キラリ」は近森会の看護師が10名近く毎回参加し、勉強していますが昨今の反社会的なニュースをはじめ、日常の自分たちの心理的欲求不満をどのように回避していくのか、急性期の短い入院期間の中で患者さんに喜ばれるような共感的理解はどのような知識や訓練の中で得られるのかなど教えられることがたくさんあります。

今回「教師とセラピスト・医師とセ

ラピスト」という対比の話があり、教師は集団を対象として指示・命令を多く使う。カウンセラーは個人を対象に提案・示唆を提供する。医師も指示・命令で、さて看護はと考えたとき本当は「提案や示唆」で接することが望ましいのに殆ど「指示・命令」止まりで、一步も二歩も心の壁に入れてないなあと振り返りました。

入院されている状況はある意味、競争社会の中で身体や心が疲れたことを反映しています。心が叫んでいる警鐘に向き合って、どうすることもできないけれど…患者さんがどこかで折り合いを見い出して新しい、倉光先生の言われる「あか明らか」を見い出せるような関わりをしたいと思ったことでした。

(かじはら わか)

リレーエッセイ

♥ スーパーおばあちゃん ♥

画像診断部 診療放射線技師

中川 以都香

私には、年齢がちょうど60歳違う祖母がいます。物心ついた時から、私にとって祖母は何でもできる「スーパーおばあちゃん」でした。裁縫や編み物は朝飯前で、セーターや帽子はもちろん、浴衣や着物まで縫ってくれました。その上、祖母は興味をもったことはどんどんチャレンジしていたので、祖母の家には、常に製作中の編み物や籠、ビーズで作った人形などがたくさんあり、遊びに行くといつも新しい作品を見せてくれました。

祖母のチャレンジ精神は今でも留まることを知らず、私が社会人になってからも、ちぎり絵や水彩画、ぬいぐるみづくり、そして去年からはクロスステッチを新たに習い始め、去年のオールドパワー展にはクロスステッチの作品を出品し、とても嬉しそうでした。

そんな祖母に触発され、何事もいつも思うばかりで行動できなかった私も、何か習い事を始めよう!!と、一年前から茶道を習い始めました。

茶道というと、硬いイメージや礼



自慢のスーパーおばあちゃんのクロスステッチ作品

儀作法が厳しいという印象がありますが、私が習っている先生達はとても優しく、未だに同じところで間違え私に根気よく教えてくれます。なにより、祖母と同世代の(もう少しお若いと思いますが…)先生方に、楽しく会話をしながら日本文化を習う、というスタイルが、私にはとてもしっくり合っているようです。

今後、茶道だけではなく色々なことにチャレンジして、ゆくゆくは私の祖母のような多趣味なスーパーおばあちゃんになりたいな、と思います。

図書室便り

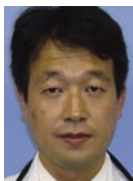
(2008年4月受入分)

- ・最新整形外科学大系 2 運動器の診断学 / 糸満盛憲 (専門編集)
- ・形成外科 ADVANCE シリーズ I-5 頭蓋顎顔面外科 最近の進歩 第2版 / 波利井清紀 (監修)
- ・水・電解質がわかる 輸液ケア Q&A / 飯野靖彦 (編集)
- ・輸液療法の進め方ノート / 杉田学 (編集)
- ・薬効別薬価基準保険薬事典 平成 20 年 4 月版 / 薬業研究会 (編集)
- ・今日の治療指針 私はこう治療している 2008 年版 Vol.50 / 山口徹 (他編集)
- ・第 38 回日本看護学会論文集 (看護管理・地域看護) / 日本看護協会 (編集) 《寄贈本》
- ・平成 19 年度博士論文 看護職と組織の相互作用に基づくキャリア・デザインシステム 看護職のキャリア意識とキャリア・ストレスからのアプローチ / 久保田聡美
- ・ベナー / ルーベル 現象学的人間論と看護 / パトリシア・ベナー (他著)
- ・人間と社会を測る 心理尺度ファイル / 堀 洋道 (他編集)
- ・働く女性 / 中川昌代 (編著)
- ・久常節子の看護課長体験にわか役人奮闘期 / 久恒節子
- ・ハイ・フライヤー 次世代リーダーの育成法 / モーガン・マッコール
- ・Advances in Aging and Health Research 2007 高齢者の排泄ケア / (財) 長寿科学振興財団 (編集)
- ・高齢者リハビリテーション 医療のランドデザイン / 日本リハビリテーション病院・施設協会 (編集) 《別冊・増刊号》
- ・別冊医学のあゆみ PPAR と疾患 / 野出孝一 (編集)
- ・別冊医学のあゆみ 臨床研究の新しい潮流 - 医学研究のパラダイム・シフト / 福原俊一 (編集)
- ・別冊整形外科学 53 変形性関節症 最近の知識 / 中村孝志 (編集)
- ・JIN スペシャル 81 救急ケア最前線 知っておくべき救急初期対応 / 箕輪良行 (編集)
- ・総合臨床 2008 年 VOL.57 増刊 新版 処方計画法 / 相澤義房 (他著)
- ・外科治療 2008 年 VOL.98 増刊 外科医に必要ながん化学療法知識 / 設楽紘平 (他著) 紘平
- ・臨床画像 2008 年 4 月増刊 若手放射線科医が知っておきたい腹部救急の画像診断 / 後閑武彦 (他著) 《ビデオ・DVD》
- ・Audio-Visual Journal of JUA Vol.14 No.2 / 日本泌尿器科学会 (監修)

(2008年5月受入分)

- ・最新整形外科学大系 10 脊椎・脊髄 / 戸山芳昭 (専門編集)
- ・医療用医薬品識別ハンドブック 2008 付録 CD-ROM 旧識別情報 / 医薬情報研究所 (編集)
- ・三訂 精神保健福祉法詳解 / 精神保健福祉研究会 (監修)
- ・精神保健福祉研究会 (監修) / 精神保健福祉研究会 (監修)
- ・高齢者訪問看護の質指標 ベストプラクティスを目指して / 石垣和子 (他監修)
- ・「看護者の倫理綱領」で読み解く ベッドサイドの看護倫理事例 30 / 杉谷藤子 (他監修)
- ・一般病棟でできる! がん患者の看取りケア あなたの疑問にがん看護専門看護

- 師が答えます / 濱口恵子 (他著)
- ・日本看護協会看護業務基準集 2007 年改訂版 / 日本看護協会 (編集)
- ・ナースのための退院調整 院内チームと地域連携のシステムづくり / (社) 全国訪問看護事業協会 (監修) 《寄贈本》
- ・医療六法 平成 19 年版 / 医療法制研究会 (編集) 《別冊・増刊号》
- ・別冊医学のあゆみ 骨粗鬆症 - 臨床と研究の最新動向 / 福本誠二 (編集)
- ・臨床栄養別冊 特定保健指導の決め手 メタボリック・シンドロームを防ぐ「グッド・ダイエット」エビデンスに基づく栄養と食事 / 前田和久
- ・泌尿器ケア 2008 年夏季増刊 患者さんへの説明に使える! 泌尿器科の疾患 & 治療の知識 / 篠原信雄 (監修)
- ・インфекションコントロール 2008 年春季増刊 感染対策のためのサーベイランス 強力サポートブック / 崎浜智子 (他編集)
- ・神経内科 68 巻特別増刊号 高次脳機能障害のすべて / 石合純夫 (他著) 《ビデオ・DVD》
- ・VIDEO JOURNAL OF Japan Neurosurgery vol.16 No.1 / 日本脳神経外科学会 (監修)



よしむら かずのぶ①腎臓内科・透析科医師②高知市③東京慈恵会医科大学④高知市生まれの高知市育ちですが、卒業以来高知県で働くのは初めてで少しドキドキしています。大学の時はハンドボール部に所属していました。スポーツ全般好きなので、高知でも何かスポーツをしたいと思っています。

編集室通信

▼『ひろっば』の薬用酒の紹介用にと、桑の実の熟すのを2年越しで待っていますが、少しずつしか熟れません。たくさん実があったら思っていたら小鳥も熟すのを待っていた様子。一握り分だけ失敬し桑の実酒作りをお願いしました。第二分院の屋上庭園も最近では芝も伸び(放題)、いろいろな植物が風や鳥に運ばれて生えてきます。6月はネジ花がたくさん咲きます。どういうわけか今年はスイカも1本…実がつかのがたのしみです。写真は次号にでも…(和)